青森県総合社会教育センター運営協議会（令和5年度第1回） 議事録（要旨）

１ 日 時

令和５年６月２８日（水）１０時００分～１２時００分

２ 場 所

青森県総合社会教育センター４階　第２教材開発室

３ 議 題

（１）令和５年度事業計画について

（２）主な事業の取組内容について

① パワフルＡＯＭＯＲＩ！創造塾

② 大学生とカタル！キャリア形成サポート事業

③ 地域の今と未来をつなぐキャリア教育推進事業

④ 生涯学習・社会教育関係職員研修講座

⑤ あおもり県民カレッジ運営事業（指定管理者）

（３）その他

４ 出席者

〔委　員〕（敬称略）

小山田委員、秋田委員、菊地委員、木村(洋)委員、沼田委員、大山委員、渡辺委員、金澤委員、田中委員

〔県総合社会教育センター〕

赤尾所長、今泉副所長、葛西総務課長、大平総務課副課長、副田育成研修課長、今社会教育主事、高舘社会教育主事、佐藤教育活動支援課長、佐々木教育活動支援課副課長、

〔学び・生かすあおもりグループ（指定管理者）〕

渡部事務局長

５ 議事録

≪案件（１）、（２）①②について≫

【委員】

私はパワフルＡＯＭＯＲＩ！創造塾（以下「パワフル」と言う。）に参加して初めて社会教育という言葉を知った。資料２の要覧１ページ目に、社会教育とは何か、社会教育の必要性等が運営方針の始め等に記載されていれば良いのではないか。

昨年度パワフルに参加して、最後に発表の場があると知っていると、それに向けて一歩でも進んだ自分になりたいと感じるため、例えば、１回目の開催の時に、全５回の昨年実施した流れ等を動画で見せてはどうかと思った。また、自分が取り組んだ結果を他の塾生に伝えて形にできればと考えた。

【委員】
　要覧の件については、「社会教育とは？」と解説や説明文を加えることが可能か冊子を作成していく中で事務局において検討してくれればと思う。

【事務局】
　パワフルについて、昨年度は第１回目からいきなり講義・演習を始めていたが、今年度は参加者からの意見を踏まえ、しっかりオリエンテーションの時間を設け、自己紹介と全体を通しての流れに触れていきたい。１回目の講義に参加すれば、一年間の見通しを持って参加できると思っている。

【委員】
　大学生とカタル！キャリア形成サポート事業（以下「キャリサポ」と言う。）の中で、大学生が、一定のスキルを得た上で中学生や高校生に対してワークショップをやるというが、そのスキルを得るために大学生を指導するのは誰がどのように行うのか。

【事務局】
　当センター職員が基本研修の中で、大学生がワークショップを行う上で必要なコミュニケーション、コーチング、ファシリテーションの講義・演習を行い、大学生の上級生が新しく参加する大学生を指導するという形で、上級生と当センター職員が二手に分かれて講義と演習を行っている。

【委員】
　ワークショップのＣＢＳ法、ＴＫＪ法、ＲＳＢ法ということを社会教育センターの職員が教えるということか。

【事務局】
　基本研修の後にワークショップ演習を行いＣＢＳ法のやり方、その際のファシリテーションの仕方、コミュニケーションの仕方というように１日かけて、２時間ずつ３つの手法について、演習を行いながら指導している。

【委員】
　例えばＣＢＳ法に参加するに当たり、基本研修を受けた大学生がワークショップへ参加して役割を演じて良いと許可される。基本研修はどれくらいの時間かけてやるのか？

【事務局】
基本研修は、コミュニケーション、コーチング、午後ファシリテーションという内容で、一日かけて講義と演習を行っている。また、別の日に１日で３つの手法のワークショップ演習を行っている。この二つの研修と演習を受けた者が企画の参加の資格を得ることになる。その後、企画に参加する前に合同リハーサルの打ち合わせに参加して、どのように行うのかを、具体的に大学生の方から示し、その後、企画に参加できるというような流れになっている。

【委員】
パワフルでは、毎年２０名程度塾生を募集しており、昨年度は当方の職員が塾生で参加した。今年度の申込状況は、現在１１名で、苦戦しているようだと聞いたが、現時点の申込は何人になっているのか。
また、募集の対象が２０代から４０代ということで、５０代の地域おこし協力隊の方が選ばれなかったことがあったが、少子高齢化、人口減少の昨今である。やる気があれば、年齢の縛りがなくても良いのでは。年代より、やる気のある方を受け入れるのが有益と考える。
キャリサポについて、大学生の新規登録２００名ということで、大幅に増加した要因は何か。

【事務局】
パワフルについて、今年度の申込状況は現在１４名となっており、東青６名、西北２名、中南３名、上北１名、三八２名で、少しずつ増えている。昨年も締め切りが過ぎてからの申込も受け入れており、オンライン面接等をして決定する。年代に関しては、昨年、本運営協議会で話題になったが、５０代だから参加できないというのは、考えなければならないので、今年度は、聴講という形で受講していただき、必要に応じて、実際に参加という形を取っていくこととした。来年度については、意見を踏まえ検討して参りたい。

【事務局】
キャリサポの新規生の増加については、大学の入学式後に行われる学生のオリエンテーションで事業の周知を行い、単位の説明をする場で、キャリサポ参加のメリット等を宣伝した他、コロナ禍になって、大学生が地域との関わりや、ボランティア活動を通して人と関わりたいという意識、意欲が高まったことによるものと思われる。
また、自身の力を身につけたいという思いがあり、キャリサポで培ったスキルは社会に出たときに必要な力だと認識しているようだ。

【委員】
　大学側では、キャリサポの授業に出ると単位につながるという授業を設定しており、キャリサポを含む指定した活動に参加した積み重ねが何回になったら社会貢献という授業の単位何単位というように設定している。この制度によって、資料にあるような登録者数となる。１年生の時に登録して、３、４年生は、ゼミや就職活動で忙しくキャリサポに参加できないが、登録に名前は残ってるという学生も若干含まれていると思う。これまで、大学生にとってもこの授業が力を付ける上で有効であると認識されているのは、社会教育センターのスタッフが大学を廻って宣伝した成果であろう。

【委員】
　これまで、パワフル創造塾に複数回受講した方がいるか。２年連続の申込は可能か。

【事務局】
　過去に２回受講した方もいる。今年度１名、過去に参加した方が再度参加した。ネットワーク作りを目的として参加している方もいる。２年連続の参加も、大歓迎で、年度毎に講師の方も変わる他、塾生も変わるので、毎年参加すると大きなネットワークの形成につながる。

≪案件（２）③④について≫
【委員】
　地域の今と未来をつなぐキャリア教育推進事業のむつ中学校で行われたキャリア教育研修会を視察した感想等について、一人の職業人の方を講師として招いて、中学校、高校で講演会をするというのは、よくある取り組みであるが、今回は、ステージ前に、２０人近くの職業人の方々が着席して中学生を迎え、背広姿の方だけではなく、保育士は現場のジャージにエプロン、制服姿の自衛隊、警察官の方、色々服装の方がいて、それを見た段階で生徒たちは期待に胸膨らませて、話を聞くという気持ちがもう一瞬でできてしまう雰囲気になっていた。予め自分が決めておいたブースに行って話を聞く際も、子供たちが前のめりで、質問も積極的であった。この先こういう事業があちらこちらでできるようになれば、子供たちのキャリア教育が進展していくのではという感想を持った。
　地域で、自前で運営できるようにしていきたいと、社会教育センターからの話があったが、そのためには、一つには「我が社は学校教育サポーター」のホームページを更新したことによって、地域の方々が身近に講師人材を派遣してくれる会社を見つけられる利便性が増すということが考えられる。地域でこのような事業を自前で開催す

る場合、中核となるのはどのような人材を想定しているのか？

【事務局】
　今回、この事業を実施するに当たり、県で県内６地区に設置している教育支援プラットフォームから協力を得ることができた。教育支援プラットフォームは県が委託する形で実行委員会形式を組織している。今回実施した下北地区は、非常に活発に活動しており、小学校２０校程を回って、職業人講師を小学校に派遣し、講話や体験をする、ユメココ教室という取り組みの他、インターシップの仲介役として活動している。しかし、教育支援プラットフォームでできることには限界があるので、来年度に向けて、企業データベースの整備をより使いやすい形で進めたいと思っている。地元の企業をすぐ検索できるので、活用し、学校、ＰＴＡ、地域の卒業生ＯＢ等と協力すれば、自前でできるのではないかと考えており、普及して行きたいと思っている。

【委員】
　以前、市町村教育委員会に勤務していたが、キャリア教育については、学校ではどこにお願いすればいいのか、見当がつかないので、間に入っている地域学校協働活動推進員が中心になり、そして、窓口になり、キャリア教育を進めて行くというのが現状である。キャリア教育研修会は、県内６地区、今年度は下北と西北で実施するということであったが、もっと回数を増やしてできれば、その地区で広がりがでるのではないかと思う。一過性のものではなくて、次々進めていけるような事業体系をつくっていければさらに広がっていくのではないか。キャリア教育に関しては県Ｐ連でも協力体制があり、タイアップできれば良いものにつながると感じた。良い形でキャリア教育を進めてほしい。

【委員】
　教育支援プラットフォームだけでは限界があり、地域の実情にもよるが、こういった事業をつなげていく中核が、地域学校協働活動推進員やあるいは、地元のＰＴＡ、地域内のＰＴＡ連合会等が考えられる。情報交換、連携等進めていく必要がある。

【委員】
　八戸では、生徒が職場を選んで、地域のスーパーや介護施設において、４日間くらい実体験をする、グッジョブウィークというシステムがある。色々な方々の職業の話を聞くことで職業に対する幅が広がる。

【委員】

キャリア教育ということで、平内町では小学生を対象に、ひらないジョブタウンを毎年実施しており、８０名の募集に対し、２倍の申込がある。今年からは、２回実施し、全員が受講できるようにした。ジョブタウンでは、地元にはない職業、例えば盲導犬の育成、警察、外科医といった方たちを招いているので、子供たちに人気がある。基本的に、職業体験は、子どもたちの興味があることだと思うので、回数等増やしていただきたい。

≪案件（２）⑤、（３）について≫

【委員】

自分が、社会教育センターの家庭教育講座を学んだ時と比べて、参加者が少なくなっており、実際に動く方たちが高齢化している。仕事の関係で参加する方がいても、自主的に参加する方が少ない。また、コロナ禍になって集まるというのがなかなか難しい。ズームを活用する方法もあるが、やはり家庭教育や生涯学習というのは人と会って直接話すことで、自分自身の体験を通して学びを身に着けていくということが重要。働いているお母さんたちがとても多いので、講座等の開催時間の問題や平日は参加できない等、人集めは大変かとは思うが、ＳＮＳを活用する等して周知に力を入れることを引き続きお願いしたい。

≪案件(3)、(4)について≫

【委員】

休憩中に雑談で家庭教育アドバイザー、家庭教育講座の受講者に男性はいるか聞かれた。どういった方が参加できるのか、参加してもいいのか、そういったことが伝わるような、周知の仕方が今後課題になる。家庭教育アドバイザーの配置に地域の偏りもあると昨年の運営協議会で話題になったが、今年度は下北の方でも、講座を開催しており、さらに、新型コロナウイルスも５類に移行して、これから良い方向に変わっていくのではと期待している。

キャリア教育に関しては、将来について希望を持つことが難しいような子供達も多い中、多感な時期の子どもたちに様々な職業の方々に接して話を聞く機会を与え素晴らしいと感じた。子供たちは、質問もなかなか出しにくい年代であり、事前にどういう職業に興味があるのかとか、質問をある程度、考えておくといった進め方が良かった。 この仕事いいなとか、こういうところに進みたいなとか子どもたちが自分事に気づく機会を与えてもらうということが、人材の発掘につながって行く。時間がかかることかもしれないが、コツコツやっていくのが成果につながると感じた。

【委員】

パワフル等、地域的な問題もあって中々思うようにいかないかとは思うが、数値的な

目標、何年間で何人の育成を目指すのかといったようなものを掲げているか。
　また、キャリサポでかなりの高校が参加していると思うが、何年かけて全高校を回るというような計画はあるか。
　県民カレッジはテレビ等で良く聞くが、具体的なことについて一般県民は良くわからないのが現状であると思うので先程学校へ働きかけをしていくという話もあったが、登録者を増やすというのであれば、学校でも良いが、一般の方へもっと周知していきたいというのであれば、やはりインセンティブを考えていったら良いのではないか。

【事務局】
　パワフルは３５期となっているが、これまで形を変えながら３５回実施してきた。平成２８、２９年度から今の形になった。毎年定員２０名を目標としている。そうすることで人数は増えてきて、地域活動が活性化されると考えている。
　キャリサポについて、全部の高校を回って実施するのかという点については、まず中学校に関しては周知も兼ねて１年間に１地区ずつ順番に回った。中学校を対象としたジュニアキャリサポでは、社会教育センターで大学生のバスを手配しており、高校に関しては、学校でバスの手配をし、バス代も負担している。全部の学校で経験していただきたいという思いはあるが、学校でバスの手配ができるか、必要な予算を確保できるかという問題もあり、ただ、お願いするということは困難な状況にある。
　県民カレッジに関しては、指定管理で実施していることから、数値的な目標が示されているので、それに向けて努力している。数字だけではないのかなという思いもあり、学生数がどんどん増えていけば、それで良いということでもなく、やはり中身が重要だと思っている。学生がいかに目標を持って取り組むかということを念頭に置きながら事業を進めていきたい。

【委員】
　今回のこの紙の資料だけを見て、説明を聞かなくても、これは絶対必要な取り組みだと思わせる必要がある。ここに載ってない写真を見せていただいた時に、こんなことが行われていて、実際に体験したその中学生や、子供たちが生き生きとしているのがそこでわかる。そういうところを落とし込みしつつ、キャプション、アンケート結果等を載せて、説明がついてしまう資料でプレゼンテーションした方が、より伝わりやすいのではないか。ｉＰｈｏｎｅだと編集もできるので、子供たちにインタビューをして、今回、参加したことに対してどういう思いがあるかというのを書き取りだけじゃなく、声を残しておいて、プレゼンテーションで使うなどという、やり方も良いのではないかと思った。

キャリサポについて、大学生が斜めの関係ということで記載されているが、これも関わった大学生にも波及して効果があるというところを踏み込んで書かれていた方がより、中学生の子達に向き合った大学生も意識が変化したということが書かれていれば、具体性を持ってこの事業が必要だと伝わる。この事業はそれぞれが必要なんだということを強く言えるような理論武装が今後必要なのではないか。